

路上

梶井基次郎

青空文庫

自分がその道を見つけたのは卯の花の咲く時分であつた。

Eの停留所からでも帰ることができる。しかもM停留所からの距離とさして違わないという発見は大層自分を喜ばせた。変化を喜ぶ心と、も一つは友人の許もとへ行くのにMからだとは大變大廻りになる電車が、Eからだと比較にならないほど近かつたからだつた。ある日の帰途気まぐれに自分はEで電車を降り、あらましの見当と思う方角へ歩いて見た。しばらく歩いているうちに、なんだか知っているような道へ出て来たわいと思つた。気がついてみるとそれはいつも自分がMの停留所へ歩いてゆく道へつながつて行くところなのであつた。小心翼翼と言つたようなその瞬間までの自

分の歩き振りが非道く滑稽に思えた。そして自分は三度に二度というふう^{ひど}にその道を通るようになった。

Mも終点であつたがこのEも終点であつた。Eから乗るとTで乗換えをする。そのTへゆくまでがMからだ^のとEからの二倍も三倍もの時間がかかるのであつた。電車はEとTとの間を単線で往復している。閑な線^{のどか}で、発車するまでの間を、車掌がその辺の子供と巫山戯^{ふざけ}ていたり、ポールの向きを変えるのに子供達が引張^きらせてもらつたりなどしている。事故などは少いでしよう^とと訊くと、いやこれで案外多いのです。往來を走っているのは割合い少いものですが、など車掌は言つていた。汽車のように枕木の上にレールが並べてあつて、踏切などをつけた、電車だけの道なのであつ

た。

窓からは線路に沿った家々の内部なかが見えた。破屋あばらやというのではないが、とりわけて見ようというような立派な家では勿論もちろんなかつた。しかし人の家の内部というものにはなにか心惹ひかれる風ふう情ぜいといったようなものが感じられる。窓から外を眺め勝ちな自分は、ある日その沿道に二本のうつぎを見つけた。

自分は中学の時使った粗末な検索表と首っ引で、その時分家の近くの原っぱや雑木林へ卯うの花を捜しに行っていた。白い花の傍へ行つては検索表と照し合せて見る。箱根うつぎ、梅花うつぎ——似たようなものはあつてもなかなか本物には打ぶつからなかつた。それがあつた日とうとう見つかった。一度見つけたとなるとあと

からあとからと眼についた。そして花としての印象はむしろ平凡であった。——しかしその沿道で見た二本のうつきには、やはり、風情と言ったものが感ぜられた。

ある日曜、訪ねて来た友人と市中へ出るのでいつもの阪さかを登った。

「ここを登りつめた空地ね、あすこから富士がよく見えたんだよ」と自分は言った。

富士がよく見えたのも立春までであった。午前は雪に被おおわれ陽に輝いた姿が丹沢山の上に見えていた。夕方になつて陽がかなたへ傾くと、富士も丹沢山も一様の影絵を、茜あかねの空に写すのであつ

た。

——吾々われわれは「扇さかさを倒たにした形」だとか「摺鉢すりばちを伏たせたような形」だとかあまり富士の形ばかりを見過ぎてゐる。あの広い裾野を持ち、あの高さを持った富士の容積、高まりが想像でき、その実感が持てるようになったら、どうだろう——そんなことを念じながら日に何度も富士を見たがった、冬の頃の自分の、自然に對して持った情熱の激しさを、今は振り返るような氣持であつた。

（春先からの徴候が非道ひどくなり、自分はこの頃病的に不活澆な氣持を持てあましていたのだつた。）

「あの辺が競馬場だ。家はこの方角だ」

自分は友人と肩を並べて、起伏した丘や、その間に頭を出している赤い屋根や、眼に立つてもくもくして来た緑の群落のパノラマに向き合っていた。

「ここからあっちへ廻ってこの方向だ」と自分はEの停留所の方を指して言った。

「じゃあの崖がけを登って行って見ないか」

「行けそうだな」

自分達はそこからまた一段上の丘へ向かった。草の間に細く赤土が踏みならされてあつて、道路では勿論なかつた。そこを登つて行つた。木立には遮さえぎられてはいるが先ほどの処ところよりはもう少し

高い眺望があつた。先ほどの^{ところ}の処の地続きは平にならされてテニスコートになつてゐる。軟球を打ち合つてゐる人があつた。——路らしい路ではなかつたがやはり近道だつた。

「遠そうだね」

「あそこに木がこんもり茂つてゐるだろう。あの裏に隠れてゐるんだ」

停留所はほとんど近くへ出る間際まで隠されていて見えなかつた。またその辺りの地勢や人家の工合では、その近くに電車の終点があるうなどとはちよつと思えなくもあつた。どこかほんとうの田舎じみた道の感じであつた。

——自分は大変なところを歩いてゐるようだ。どこか他国を歩い

ている感じだ。——街を歩いていて不図ふとそんな気持ちに捕らえられることがある。これからいつもの市中へ出てゆく自分だとは、ちよつと思えないような気持ちを、自分はかなりその道に馴なれたあとまでも、またしても味わうのであつた。

閑散な停留所。家々の内部の隙見える沿道。電車のなかで自分は友人に、

「旅情を感じないか」と言つて見た。穀斗科かくとこの花や青葉の匂いに満された密度の濃い空気が、しばらく自分達を包んだ。——その日から自分はまた、その日の獲物だつた崖からの近道を通うようになった。

それはある雨あがりの日のことであつた。午後で、自分は学校の帰途であつた。

いつもの道から崖の近道へ這入はいつた自分は、雨あがりでの赤土が軟やわらかくなつて、ことに気がついた。人の足跡もついていないようなその路は歩きたび少しづつ滑つた。

高い方の見晴らしへ出た。それからが傾斜である。自分は少し危いぞと思つた。

傾斜についている路はもう一層軟かであつた。しかし自分は引返そうとも、立留つて考えようともしなかつた。危ぶみながら下りてゆく。一と足下りかけた瞬間から、既に、自分はきつと滑つて転ぶころにちがいないと思つた。——途端自分は足を滑らした。片

手を泥についでしまった。しかしまだ本気にはなっていないかった。起きあがろうとすると、力を入れた足がまたずるずる滑って行った。今度は片^{ひじ}脇をつき、尻餅をつき、背中まで地面につけて、やっとその姿勢で身体は止った。止った所はもう一つの傾斜へ続く、ちよつと階段の踊り場のようなになった所であつた。自分は鞆^{かぼん}を持った片手を、鞆^{かぼん}のまま泥について恐る恐る立ち上つた。——いつの間にか本気になっていた。

誰かがどこかで見ていやしなかつたかと、自分は眼の下の人家の方を見た。それらの人家から見れば、自分は高みの舞台上で一人滑稽な芸当を一生懸命やっているように見えるにちがひなかつた。——誰も見ていなかった。変な気持であつた。

自分の立ち上ったところはやや安全であった。しかし自分はまだ引返そうともしなかったし、立留つて考えてみようともしなかった。泥に塗れたままた危い一步を踏み出そうとした。とつさの思いつきで、今度はスキーのようにして滑り下りてみようと思つた。身体の重心さえ失わなかつたら滑り切れるだろうと思つた。鋌びょうの打つてない靴の底はずるずる赤土の上を滑りはじめた。二間余りの間である。しかしその二間余りが尽きてしまった所は高い石崖の鼻であつた。その下がテニスコートの平地になつている。崖は二間、それくらいであつた。もし止まる余裕がなかつたら惰力で自分は石垣から飛び下りなければならなかつた。しかし飛び下りるあたりに石があるか、材木があるか、それはその石垣の出

つ鼻まで行かねば知ることができなかつた。非常な速さでその危険が頭に映じた。

石垣の鼻のザラザラした肌で靴は自然に止つた。それはなにかが止めてくれたという感じであつた。全く自力を施す術はどこにもなかつた。いくら危険を感じていても、滑るに任せ止まるに任せる外はなかつたのだつた。

飛び下りる心構えをしていた脛はその緊張を弛めた。石垣の下にはコートのローラーが転がされてあつた。自分はきよとんとした。

どこかで見ていた人はなかつたかと、また自分は見廻して見た。垂れ下つた曇空の下に大きな邸やしきの屋根が並んでいた。しかし廓かくり。

不意に自分を引摺り込んだ危険、そして今の自分。それはなにか
ひきず
均衡のとれない不自然な連鎖であった。そんなことは起りはしな
かったと否定するものがあれば自分も信じてしまいそうな気がし
た。

自分、自分の意識というもの、そして世界というものが、焦点
を外れて泳ぎ出して行くような気持ちに自分は捕らえられた。笑つ
ていてもかまわない。誰か見てはいなかったかしらと二度目にあ
たりを見廻したときの 廓かくりよう 寥とした淋しさを自分は思い出した。

帰途、書かないではいられないと、自分は何故か深く思った。
それが、滑ったことを書かねばいられないという気持か、小説を

書くことによつてこの自己を語らないではいられないという気持
か、自分には判然はつきりしなかつた。おそらくはその両方を思つてい
たのだつた。

帰つて鞆かばんを開けて見たら、どこから入つたのか、入りそうにも
思えない泥の固りが一つ入つていて、本を汚していた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1925（大正14）年10月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiyaana

校正：野口英司

1998年9月16日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

路上

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>